

## 14. RI lymphgraphy (第2報)

小林 光昭 中西 敬 沖田 功  
末富 一臣 永野巳喜雄 桜井 孝  
(山口大・放)

$^{198}\text{Au}$ -colloid と  $^{99\text{m}}\text{Tc}_2\text{S}_7$  colloid の RI lymph graphy について検討した。 $^{198}\text{Au}$ -colloid の場合は、colloid 粒子が小さく拡散率がよく para aortic, liver の描出は良いが、局所被曝線量が大きい。Scanning 時期は注射後 3 時間以降、24 時間

まで可能である。 $^{99\text{m}}\text{Tc}_2\text{S}_7$ -colloid は粒子が大きく拡散率が悪く腹部の scintigram は骨盤部に要する時間の数倍を必要とする。また scanning 時期は注射後 2 時間が最良である。 $^{99\text{m}}\text{Tc}_2\text{S}_7$ -colloid は、半減期が短く、他の検査に支障をきたさない。Scintigram からは、像の非対称性、各リンパ節群の radio activity の差、異常部位の集積あるいは欠損が診断基準として挙げられ、肝陰影の濃度からリンパ動態も推察される。以上から RI lymph graphy は、有意な検査であると考えた。